
I love you

桜咲 水穂

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

I love you

【Zマーク】

Z6596D

【作者名】

桜咲 水穂

【あらすじ】

似合わない。そう思いながらも、頭に浮かぶ『バレンタイン』の6文字。…決意をし、チョコレートを買いに行つた哀は、その途中で誘拐されてしまつて…!?

バレンタイン。

それは、女性が男性にチョコレートを送る日。
義理チョコ、逆チョコ、友チョク…………それと、本気で愛が籠った
チョコレートなどがある。

…昨日をしたり、愛を深めたりするには、丁度いい日だ。

数週間前、目に入ったのは、『バレンタイン』の6文字。
哀は、溜息を吐いた。

どうしたの、私。私らしくないわ……。

ランドセルを背負つたまま、流石に実際に睨みつけると大変なので、
そこ一点を見つめたまま心の中での文字を睨みつける。

「…………」

はあ…………。

無意識の内に出でた溜息。

本当に、どうしたかったのかしら、私。

哀はそんなことを思う。

- …どうしてしまったのだろうか、自分は。
- チョコレートなんて、バレンタインなんて…
- クリスマスだって、みんなみんな、自分に似合わない。
- そんなことを考えている時、思い浮かぶ1人の少年。
- …自分が作った毒薬のせいで幼児化し、高校生としての生活を奪つてしまつた人。

江戸川コナン」と「藤新一」。

好きなの?

…No……。

嫌いなの?

…No……。

聞かれれば、両方『No』になるだろう。

…自分の気持ちが分からない。

…好きなのか、嫌いなのか、普通なのか。

哀は、そのままその場を後にした。

それが、数週間前の出来事。

「哀君、明日はバレンタインじゃのぉ…………」「

哀君は誰かにチョコをあげたりせんのか？

「私が誰かにチョコレートをあげると思ひの？~のうじに。」

しかも、バレンタインに。

阿笠の問いに、哀は冷たく言い放つ。

視線は女性雑誌に向いていて、暫くの間はその瞳に姿すら映していく
れなそうだ。

そんな哀の様子に、阿笠は苦笑する。

何となく、哀の答えが予想出来たのだ。

「じゃがのあ……」

「例え博士でも、あげないから」

「…………」

「ただでさえ、脂とか油とか…肉とかを禁止されている人にチョコ
レーントなんかをあげるわけないでしょ？~」

そう静かに言う哀に。

阿笠は心中で涙を流したのであった。

どうやら、バレンタインの話題を出したのは、もしかしたらチョコ
レーントを食べることを許可してもらえたかもしれないと思ったから
らしい。

それと、哀のチョコレートを貰えるかも…とにかく一つの思いも
あつたらしい。

だから、どうしちゃったのよ、私。

雑誌を捲ると、『バレンタイン特別企画』好きな人のハートをゲットしよう!』という大きな文字が嫌でも瞳に入ってくる。その下には、チョコレートの作り方が書いてある。

別に、そんなものに興味があるわけではない……が。

素直になってしまいなさい。

そんな命令が、頭の中に響いて。
哀は、眉間に顰めた。

勝手に瞳が脳がその続きを求めてくる。
仕方なく、雑誌に顔を落とすのだった。

…彼を好きという気持ちは確かだ。

彼には、彼女がいる。

そう思い、この思いを押し殺しているけれど。

やつぱり、好きなものは好きなのだ、愛しているのだ。

似合わない。

彼は、珍しいことがあるなどとしか、思ってられないかもしない。

……こんなにも、好きなのに。

全ての原因は、素直になれない自分にある。

哀は、決意したように雑誌を握り締め、ソファから立ち上がった。

逃げるなよ灰原…自分の運命から…逃げるんじゃねーぞ…

…逃げてなんか…逃げて、なんか…いない…わよ…。

…哀は、そのまま外へと駆け出した。

「はあつ、はあつ、はあつ……」

近くのコンビニまで走つて行つた。

全力で走つたせいで、息苦しい。

だが、それすら我慢してコンビニ内に入る。

中は暖房が効いていて、寒い外とは大違ひだ。

そしてそのままチョコレート売り場まで行き……赤い包装と白いリボンで包んである可愛らしいチョコレートを手に取つた。

「…………」

そして、そのままレジまで行き、商品を差し出す。

「 250円です」

バックから財布を取り出し、その中から更に250円を取り出す。

……丁度、ピッタリあつた。

袋に入れられたチョコレート片手に、帰路に着く。
そこには誰もおらず、無人だつた。

……いや、そう見えるだけだ。

哀ともう1人　　いかにも怪しい黒服の男と車。

……哀が気付かないのは、緊張しているからだろうか。
足音を立てずに……男は哀に近づく。

誘拐、だ。

「…………つぐ…………」

ちよつと離し・・・・・つー

「わあて。一緒に来てもらおうつか?お嬢ちゃんよお

男の腕には、ぐつたりと氣を失った哀の姿。

だが、その手にはチヨコレートが握られたままだった

…。

「…………はあ……? 灰原がいなくなつたあ?」

どつかに出掛けたんじゃねーの?

『そ、そつじやなくてじやな……! 電話があつたんじゃ……!』

「電話あ?なんの?」

『身代金要求の電話じゅよ…………!』

その言葉にコナンは全身に鳥肌が立つていいくのが分かつた。

「誘拐、か…………!』

ピチヤン ピチヤン

……そんな水音に、哀は覚醒した。

「…………」

ゆっくりと目を開き、辺りを見回す。

そこは、どこかの倉庫のようだった。

ダンボールが積み重ねられ、ロープがそこら辺に転がっている。
……もう、使っていない倉庫なのだろうか。

「こは…………」

「……お目覚めか？お嬢ちゃん」

「え……！？」

だ、誰なの！？あなた達！！

「ほう……？大人っぽいんだな……」

それに、ガキにしちゃあ、綺麗な顔してやがる……。
海外に売りや、大層な金になるな……。

「……どういうこと？」

哀は男達を睨みつける。

1人のリーダーらしき人物が、口を開いた。

「…………お前の保護者に、連絡をした」

身代金、5000万円を用意しろとな……。

「な、なんですって！？」

「携帯、拝見させてもらつたぜ」

「んぐれーのガキが携帯とは…洒落てるもんだなあ。

ますます気に入つたぜ。

クツクツ…クツクツクツ…

男の不気味な笑い声が、もう随分の間使われていないのであるう倉庫に木靈する。

それが気持ち悪くて、哀は吐き気を覚えた。

「し、新一……」
「博士！ 灰原は！？」
「…まだ、何も分かつとらん」「…そうか…」
その言葉に、コナンは顔を顰める。
「警察にも通報しとらん…」「…連絡は、何かあつたか？」「いや…身代金要求の連絡以外はまだ何も
P r r r r r r r … P r r r r r r r …
…電話がきたことを、知らせる音。
緊張した空気が漂い、コナンは唇を噛み締め取つた。
「…もしもし」「…

『よお…5000万は用意出来たか？』

受話器を、手に

「…………出來た」

「お、おい…………？」

阿笠が何かを言いたそうだつたが、あえてそれは無視した。

『じゃあ、今から言う場所に金を持って来い。……警察に通報はするなよ?』

「…………」

ガチャ

ツーツーツーツー…………

後には、機械音と沈黙が残つた。

「だつたら、上方に本物を、下方に新聞紙を敷き詰めときやい
いんだよ」

「そ、そつか…！」

そうしたら、本物を用意しなくても済むし、盗られる心配もない！

…「クン

無言でコナンは領き、阿笠は新聞を切り始めたのだった。

「……持つてきたよ」

倉庫内に響いたのは、ボーイソプラノの子供の声。
それに不審に思った仲間の1人が影から出て来る。

「こ、ども…？」

大きな黒い鞄を持ち、そこに立っているのは1人の小学生くらいの
男の子。

「身代金、欲しいんでしょ？ ホラ、持つて來たよ」

「お、おひ…」

流石に、子供が持つてくるとは予想出来てなかつた誘拐犯は、呆氣
とられた。

笑顔でこちらに鞄を差し出してくる少年。

戸惑いながらも、それを受け取った。

「ねえ、哀ちゃんは？」

え……？

『哀ちゃん』…………？

「哀？…ああ、あのガキの名前か」

そう言って、他の男とともにロープで繋がれ連れてこられた哀の姿。

「江戸川君！！」

「うるせえ！黙つてろ！！」

「……」

1人の男が、哀の口を塞ぐ。

暫く抵抗を続ける哀だったが、それもすぐに収まった。

「ね、哀ちゃんを返してよ……」

『哀ちゃん』

そう呼ばれるたびに、心臓が高鳴る。

「フン……信じてたのか？」

男の言葉に…変わる、気配、雰囲気、空氣。

ゾクリと、男は背に悪気が走るのが分かつた。

「信じてるわけ、ねえだろ？」

「……つ！んなつ……！」

「なあ、知ってるか？」

サッカーボールって、当たると結構痛いんだよなあ……。

「だ、だからなんだ！！！」

キュイ、とコナンは唇を引き上げ、不敵な笑みを浮かべた。

そのまま、キック力増強シユーズに手をかけ…最大にする。

そして、どこでもボール射出ベルトに手をかけ、ボールを出し…。

自分の力も最大にし、蹴り飛ばした。

「……つぐあ……つ！！！」

ドサリ、という音をたて、男は倒れた。

そしてそのまま2人目の男に麻酔銃を打ち込み…誘拐犯2人組は全滅した。

「……大丈夫か！灰原……」

「え、ええ……何とか……」

哀は手元を気にしていた。

……その手には、未だにチョコレートが握られている。

「ん？ 何だ、それ……」

「え……こ、これ……は」

「ひ、どうしましょ……」

「えつと……」

哀は暫く、珍しく慌てていた が。

ついに、決意したようにコナンに差し出した。

「あ、あなたに、あげるわ……」

「え？ も、もしかしてチョコレートか……？」

中身を確認し、コナンは戸惑いながら哀を見つめる。

「そうよー悪い？」

ブンブンと音をたてる程、コナンは首を振った。

「…………サンキュー」

「…………どういたしまして、名探偵さん」

それから數十分後、誘拐犯は警察に取り押さえられた。

今はまだ、この気持ちを伝えられないけれど

いつか、伝えたいと思つ

自分の気持ちに素直になれる日は、一生来ないかも知れないけど

：私、灰原哀　　富野志保は、江戸川「ナン」と「藤新一」を愛しています

(後書き)

今日はバレンタインですね~。

因みに私、渡す人、いません(笑)

お願い事

だーれーかー!

私のような者を支持して下さる心優しき方!

何か小説でリクエストがあつたらどーぞ。

(…嘘なのかな。本当なのかな。期待しないで待っていて下さいね
▽)

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6596d/>

I love you

2010年10月9日01時13分発行